

まつかぜ

平和学園小学校
同窓会連絡誌

〒760 市富士見町5-2
電話 0467 (82) 0093

今年の三月には27名が卒業し同窓会の仲間に加えていただきました。このように直接同窓生を送り出すことにより皆様との関係が一段深くなる思いが致します。昨年は学園全体の同窓会があり多数のご出席をいただき、いつまでも母校を思ってくださいる気持ちにふれ感謝しています。また秋にはPTA・OB同窓会を開催し皆様のご両親多数のご出席をいただき、それぞれの年代当時の懐古談から、平和学園に対する熱い思いを伺うことが出来本当に良い集りでした。

さてこの同窓会誌も第四号となりますが、編集名簿整理発送と大変な労をとってくださいるのは横山先生です。殆どの同窓生や両親と

つながりのある先生の存在は大きく、着任三年目の私を助けていただき皆様と共に感謝したいと思えます。小学校の近況をお知らせいたします。

母校愛にささえられて

小学校長 笠野 欣 二

(一)この夏休み校舎の内装が行われました。床天井壁面廊下と見違える程美しくなり、二年前の外装工事と合わせ面目を一新しました。前庭の緑の芝生、四季の花々が咲き乱れる花壇が道行く人に美しい学校との印象

今年卒業生から臼と杵が記念品として贈られました。(四)教育内容の充実をめざし信頼される学校づくりを重点目標に学級経営、生活指導、進路指導の三点に力を注いでいます。自然教室、お話袋、運動会、学芸会、

を与えています。(二)グラウンドに土を入れ整備しました。現在サッカーが盛んで一層熱が入ることでしょう。正規のサッカーゴール、防球ネットを備え来年はグラウンドの一部を芝生にしたいと考えています。(三)PTAより20㎡の水田を造っていただきました。六月に田植を行い成育中、秋の収穫感謝の餅つきは恒例の行事になっています。尚

音楽演奏発表会、バザー、クリスマスマス、スキースケート教室、餅つき、児童会主催のゲーム大会(ドッチボール・将棋・オセロなど)私立小学校陸上水泳大会参加など、皆様おなじみの楽しい行事が、児童の学校生活の励みになっています。最後に児童募集についてお願いいたします。今年一年生は23名を迎え昨年に続いて平和学園本来の入学児童数を確保することが出来ました。これは皆様のご協力によるもので改めて感謝申し上げます。少人数の行き届いた教育、家庭的な愛の学園、聖書にもとづく人間教育をめざす学園です。今年も間もなく十月の児童募集期を迎えます。皆様が平和学園に学ばれた期待と誇りをそのまま皆様のお子様にも、また友人知人に学園の紹介をいただきたいと思えます。二年前「もう一つのトットちゃん学校」と本校がある雑誌に紹介されましたが、こんな

勤め方で紹介いただけたいと思います。現在職員十名笠野 横山 野口 榑岡 成瀬 増淵 田村 雨宮 碓井 田巻です。三橋、山田先生は一年退職されました。今年卒業式に九州から真能先生が列席くださり感激しました。皆様折にふれご来校ください。健康をお祈りします。

前学園長 大塚秀雄先生御就眠

二代目学園長、大塚秀雄先生はここ二年ほどご病気でしたが、四月十四日お眠りになりました。おほえている皆さんも多いと思いますが、小学校には週一回朝の礼拝のお話をして下さいました。植物や花のお話が多かったとおほえています。目がきれいで、しかも視力が強く、一生眼鏡をお使いになりませんでした。九十才でした。

帰って来た二世

米山悦子

ただいまあー。元氣よく二十七年ぶりに帰って来ました。と言っても横井さんや小野田さんの話ではなくて、我家の娘の話。四月から平和学園に編入出来たのです。まさか親子で平和にお世話になるなんて夢どころか、考えた事もなかったのです。なぜって。今、座間に住んでいて、平和学園が思い出も多く、良い学園と分かっている、遠い学校へ通学させるなど思いもありません。なのにどうしてこうなったのか、訳をお話ししますね。

娘が一年生になる時、学校の事で随分考えました。一人っ子だし、近くにお友達も出来て楽しく過ごせたらと願いを込めて地域の小学校に決めました。一年過ぎ、二年生も終ろうとする頃、娘の様子を見るにつけ、明かるくて元氣が余って

る子だけれど、これで良いのかな。何かちがうなと自分の子供の頃など思い出されて、疑問と不安にかられます。よし。それならば

娘に合う学校があるはずと、学校捜しを始めます。有りました。三校も。各学校に伺い、下準備などして春休みを待ちました。実はこの時、平和学園は候補に入っていないのです。(横山先生ごめんなさい。)娘に学校を変える話をする大喜び。「私、電車に乗って学校に行きたい。」翌日から学校訪問です。どこも気に入った様子で迷いません。「お母さんお願いだから平和学園に行ってみて。遊びに行くだけでいいから。」

の言葉にコロリ。二度も遊びに行ってしまうついに、「平和学園に行きたい。」に変わります。自分の肌合う学校と感じたのでしょうか。うーん。悩みました。もう開き直りの心。友ちゃん、大変だけれどガンバツテと送り出しました。そ

して今、二世が平和学園に帰ってきたのです。

帰って来た卒業生

森 千城

私が、松林に囲まれた平和学園小学校を卒業したのは二十七年も前のことです。その頃は、学校のまわりには田んぼや畑が有り、学校の帰りに、そこでザリガニやギンヤンマなどをつかまえて遊んだものでした。

クラスは一クラスで家庭的な雰囲気、六年間をすごしました。今でも一緒に遊んだ友達とつき合いが有り、楽しかったその時のことが目にうかんできます。

学校はその頃も現在もあまり変化がなく多少せまくなつたみたいですが、近くに海が有り自然の松林に囲まれた砂丘に建っている校舎は、子供が自由に遊び学ぶのにはすばらしい環境であると思います。自分の子供が小学校に行

くことになり、さてどこへ行かせたら良いかと考える学校を決めることはおおげさな言い方をすれば子供の将来をも決めることになるとも思いません。それだけに子供にとっても、親にとっても大変重要なことです。

子供はすぐに学校生活になれるだろうか、今までの自分達のして来た家庭でのしつけは間違っていないだろうか、自分達の持っている技術等を身につけさせるには、等々、子供に対する期待と不安がいっぱいです。以上色々書いてみました。平和学園は自由な校風と先生方の教育に対する理解も深く、また、人数が適当で多くの可能性を持った子供達に色々なことをさせることが出来ると思います。勉強もガリ勉でなく遊びながら自然に身につけさせ、他人の事を考え大切にしている人間性の豊かな子供になっ

てもらいたく平和学園に帰って来ました。

日時計のタイムカプセル — あと八年

47年卒業(生方、川崎、

川原、石沢、上菌、尾高、

担任山口先生)の皆さん、

日時計のタイムカプセルあ

けるの、あと八年になりましたよ。去年あれを作った

小原銀之助さんが亡くなりました。

外国にはドイツの

ハンブルクとアメリカのシ

カゴにあれと同じものがある

そうです。貴重品です。

ところで八年後の話ですが、

あれをあげるのは秋分の日

となっていましたね。九月

二十二日の十一時三十六分

太陽が南中する時としまし

よう。忘れずに来て下さい。

当日はプレイデーとして、

全校生徒、父母、卒業生が

集まることになっています

から、皆さんの見ている所

であけて下さい。中に入っ

ている録音テープはオーブ

ンリール式です。ピクター

の柳生くんよろしくたのみ

ます。

第一回PTAOB会

伊藤 タカ

私は息子や娘が同窓会から帰って来ると、友達のことを種々聞いては、その様子と小学校当時を重ね合せ、お母様方にも一度お逢いたいと何回となく思っていましたところ思いがけなく実現することになりました。私も十人程の方々に連絡を取りましたが、皆様都合悪く欠席される方が多い中、27年卒業の鈴木龍二さんのお母様、御息息は十数年前に事故で亡されたのですが出席なさるとのこと、知っている方が多数お出になつてくれればと一生懸命祈っております。

当日なつかしい顔であの古い講堂がうずまるものとは心はずませまいました。第一回でPR不足だったこと、卒業生名簿たよりで、実家への連絡不徹底なので人数は40人程でしたが、若い現役のお母様の暖かいお

もてなしと、なつかしい顔で本当に感激でした。

長男の組(28年卒)の萩原けい子ちゃんのお母さんは八十ウン歳でかくしゃくとしておいでになり、鈴木さんともお話がはずんでおられほっといたしました。次男の組(31年卒)は、堀たけしちゃん鈴木信ちゃんのお母さん、長女の組(34年卒)は五年生で転校した菊地保夫ちゃんのお母さん。そして次女の組は、毎年一回集まる三六会(36年卒業のお母さんの会)をこの日にしましたので七人の出席がありました。

今もそうですが、平和学園のPTAはクラスの上下関係なく親しんでおりましたのでこうやって何年か経てお逢いしてもやはりお友達の様に親しく交わることが出来ました。古くないOBの方が、鉄板会結成の裏の苦勞話して下さいました。今でもバザー恒例の出し物としてお父様方によるやさそばの出店はひき

つがれているようです。

バザーでは私達の頃は、おすし作りにニンジンを刻みしいたけを煮つけ夕方遅くまで学校で準備したものです。運動会ではPTA仮装行列で競い合いました。そんな方々と只お会いして「お元気」と手を握り合えば三十年前はあっと目の前に現われた様な気がいたします。

今後この様な企画がありました時には一人でも多くおさそいの上おいで下さいまして、旧交を深め、平和学園PTAの良さを若いお母様方にひきついでいってほしいと願っております。

PTAの同窓会

竹内民江

横山先生は不思議な方です。先生がPTAの同窓会を開きたいと昨年の松風で仰言って、先生のお声掛けならと大勢の方が集まって下さったわけで……

しかし松風を受取ったの

は卒業生ですから、親には何も伝えない例もあり、更に親子二代のPTAという方がすでに何組も存在しているの、自分に来た松風は親への案内で、子供に来たのが自分への案内で……

どうもあまりはつきりしないと、色々頭をひねって、これはPTAの同窓会だと考えつづくのに時間がかかったとか。だからやっぱり横山先生らしいという所に落付き、そこで皆納得するから本当に不思議な先生です。その横山先生を中心に、

なつかしい古い講堂でお茶やケーキを頂きながらおしゃべりに花が咲き、そのうち古いPTAの方は横山先生に「ちよっとあんた」などと三十年昔に返って呼びかける方がいたり、個性的です。昔も今も変わらない様です。子供のことはさておいて親が平和学園をすっかり気に入って、ふるさとに戻った様な気持で集うというのは、これ又昔も今も変

りがない様で、ご夫婦揃ってご出席の方も多く、利害関係を越えたあたたかい平和の雰囲気。集まった皆が大切に思っているのだとつくづく感じた事でした。裏方をお手伝いした一人として、とても楽しい一日でした。

「お父さんお母さん
の住所を知らせて
下さい」

PTAの同窓会なんて全く前代未聞でしょう。昨年十一月十三日、なつかしいおんぼろの講堂で、五十人ぐらいのおばあさんおじいさんおばさん……が集まって下さいました。萩原さん、鈴木さん、伊藤さんが、なんととっても最長老格でした。昭和二十二、三年ごろの、PTAのはしりの方々です。萩原さんはその後おつかれのようですが、もう一度この同窓会に来て頂きたいものです。

「この頃思うこと」

29年卒
木村(大林)直子

思いもかけずに同窓会誌に「寄稿」をとの事に、今改めて自分の卒業年度を見「エート」今は59年だから29を引くと「ヒエー」何と小学校卒業以来30年!!
ウーン!! (しばし絶句)

何と30年の歳月とは何ぞやと考えると、真赤なサルのような顔をクシャクシャにして「フギャー」と産ぶ声を上げた生れたての赤ちゃんも、今や、分別臭げに厚顔無恥? 世代!! これは凄いい事だ。マア誰しも生きていけば30年でも何十年でも過ぎるのは、これ当然なんですけれどどって感じて「光陰矢の如し」の現実には半分驚き半分ヤケクソと改めて恐しい恐しい年月の流れを、否応なく感じさせて下さいました同窓会誌に敬意を表し、最近特に感じる草々の雑感を(正にこんな事、感じる事自体が年を取った証

明の証明)という所ですが……。昔小学校か中学の時か忘れましたが、国語の教科書の中に、ある人の言葉で、「人間40歳を過ぎたら自分の顔に責任を持たなくてははいけない。」等と確かこんな言葉があったのです。しかしその時はまだ深い意味など分りっこないワルガキ時代。何云ってんのいくら自分の顔に責任持たなんて云われたって、私が親にブスにして下さい、って頼んだ訳じゃないのに、どういふ訳かカワユクない私、やっぱり美人の方がどんなにいかしれやしないワ、だって第一カワイイ子の方が先生には可愛がられるし、男の子にはモテルし、やっぱりそっちの方がズットズット得なのに、この小父さん何云ってんの全く。と一人不貞腐れて居りました。そして人間はよく皆平等、等というけれどあれは嘘だワ。だってこの世には美人と不美人が居るといふ

に生れ乍らにして差別を受けているワ、と何故か納得よしそれじゃ心に美を積もう等とその時は思ったかどうか定かではありませんが、人間40ウン歳ともなると、それはそれなりに色々な人の生き様を見、様々な感慨にふけり多々感じる今日この頃、それは正に神学者のニーバーと云う人の祈りの言葉の中に「神よ! 変える事の出来ないものは、それを受け容れるだけの心の落着きを与え給え。変える事の出来る物については、それを変えるだけの勇氣を与え給え。そして変えることの出来るものと、出来ないものとを見分ける知恵を授け給え」と祈ったという事です。今の私にとってはこの言葉の中にどんなに深い深い意味合があるかという事の多少は理解出来る年代になり前記の「自分の顔に責任を持って」と同じ意味で本当に本当に心から感動するのです。

題は、各々の人々が若き日にどんな意識を持って生きて来たかという積み重ねの上に来たるべきものだと思えば、毎日の日々を精一杯に生かして生きている人にとっては老後も又、素晴らしいものであるし、少しも恐れる事のないものである筈です。素晴らしい人生に乾杯!!

目 標

34年卒 薬品孝久

人間としてのいのちの根がふかくなるのはだから道は一本単純でまっすぐがいい何かを欲しがるとき欲しがったところが曲がる道は一本まっすぐがいい (相田みつを著)

雨の日には雨の中を風の日には風の中をという著書の中の一節を私の信念として、生きてはおりますが、なかなか、この様には、行かない。私が、現在の仕事を、しているのも、まずは、自分が食べる為、それから自己顕示欲を満足させる為。世の為、人の為じゃないのです。全然。どんな場合でも、世の為、人の為なんてことは、ないんです。どこかに必ず、自分の為がある。いつの才になったら、そこから抜けられるの

でしょうか。

でも決って、自分を卑下したり、ダメな人間なんだな、なんては思っていないです。どうひっくり返っても、私なんだから。

いろいろあるんだな人間だから、いろいろあるんだな生きていくんだから。

34年卒として、一言書けと言われまして、私だけが、原稿の遅れに遅れた理由を書いた訳では、ありませんが、久々に、小学校時代のことから、思い出して、今日迄のことを考えておきますと、数十分で、二十五年間のことを順を追って振り返ることが、出来るんです。不思議です過去のこと。今迄、いつも、これから起こる私にとって喜ばしいことに向って、頑張っては来たのですが、現在の自分なんです。一言で済ませてしまうことが、出来るんです。これから、私に展開される人生を後で振り返った、その時、また今の自分なん

ですって一言でかたづけしてしまうのでしょうが、なにが、その間、起こるか、解らない事に向って、単純に真直ぐな道を歩み続けて行きたい。

そんな私です。

南の島で思ったこと

39年卒 鈴木彰二

先日サイパン島に行く機会がありました。ハワイのようにはハデではありませんが砂浜は白く海は例え様な美しい色をしておりました。しかし、この南の島は多くの戦争の跡を残した島でもあるのです。名所旧跡の多くは戦争に關した物ばかりで大砲や戦車の残骸が島のいたる所にあります。パンザイクリフ、スイサイドクリフなどは戦争の記録映画に出てきたままの姿で、四十年という時の流れはそこには無いようです。そこには立っていますと戦後に生れた私達でも自然に言葉が少

なくなりまして。

また沖の小島へ渡ろうとした時、舟の底にガラスの窓が付いたグラスボートで行くのですが、途中の海底には戦争中に沈んだ日本の飛行機や潜水艦がありそれを上から見せて行きます。その巨大な潜水艦がねじれるように海底に横たわっているのを見た時なんともいえない恐怖感に襲われました。これに乗っていたであろう多くの兵士の何人がこの青い海の下から出て、輝く陽の光を再び見ることが出来たのだろうか、おそらく四十年前の海も今と同じように美しかったと思いません。

たしか平和学園の囲りに私達に通っていた頃は戦争中に使った建物の跡のような物があつた記憶がある。また天気の良い日など海岸へ弁当を食べに行き砂遊びなどしていると機関銃の弾丸がいったい出てきた。その頃は宝物でも見つけた気分でしたのを憶えている。

そして私達が小学生の頃は今のキンクマンや怪獣がスターであったようにゼロ戦や戦艦大和がスターだった。クラスの中にはやたらとそれらに詳しい博士みたいな奴もいた。そして根に土がいったい付いた草を弾丸の代りにして板や木の枝で要塞を造り戦争ごっこを女の子もいっしょによくやっていた。それは子供心に楽しい遊びでした。

しかし今になって実際の戦争の跡をこの目で見るとやはり恐い、こわいという気持ちを素直に体全体で感じました。それと同時に舟で私達を案内してくれたサイパンの人達の視線も気になりました。島で商売をしている人達は私達日本人は百ドル紙幣に見えるという。昔呼びもしないのに多くの日本人が平和な南の島にやって来て、そして揚句の果ていたる所に大砲で穴をあけて多くの人が死んでいった。そして又同じ日本から多くの人がやってくるの

を見てサイパンだけでなくアジアの他の国の人達はどうのように私達を見ているのでしょうか。私はなんとなく私達日本人は全てではないけれどなんとなく偉そうに彼等の町を歩いている気がしません。欧米ではその逆のような気もしますが、それが今日の日本を築いたのかもしれない。とかかってに思いつつも私は日本人として南国の陽で真黒に日焼して帰ってきてしまいました。

平和学園

小学校の思い出

49年卒 水野 健

平和学園を卒業してもう早いもので十年になる。松林に囲まれた小学校時代を今、ふり返ると、それは、多くの友人、先生に恵まれた六年間であったと言える。秋空の下での運動会や天城山荘でみんなと過した自然教室をはじめ、学芸会クリスマス礼拝、スキー教

室など、いずれも当時のことが今でもはっきりと目に浮かぶ。

私達のクラスはどうしたわけか、何をするときも、男子と女子がわかれていて、お互いが仲よくするという事が少なかったようだ。た

まに男の子が女の子と一緒に遊ぼうものなら男子の間で村八分にされんばかりに扱われたのである。

当時の私は弱い者いじめでそのくせ強い子にはしたがっているという男の風上にもおけない子でよく女の子からは

「キザ男！ キザオ！」などとひやかされ、目の敵にされたものだったが、そんな女子の友達もたまに会うと、もうすっかり見ちがえるほど女らしくなって、あらためて時の流れを感じ

る。そんな思い出深い平和学園の松林の数もしだいに少なくなり、当時、私達男子が授業が終わると毎日のように野球をしていたグラウ

ンドや、よくいたずらをしていた叱られた木造の図書室なども姿を消してしまったのはちょっとさびしい気もする。これも時の移り変わりなのかなあなどと思う今日このごろである。

村島帰之先生著

「潮騒はささやく」より

幼き伝道者

これは次頁の紀子ちゃんのことを、創立者の村島先生がお書きになったものです。

紀子ちゃんは小柄な愛くるしい子で、小学三年生である。はじめ、両親は、学齢に達した紀子ちゃんを附近の公立の小学校へ入学させようとしたが、乱暴な子が居て、別荘の子と見るといじめたり、ものをせびつたりすると聞いて、少し遠方ではあったが、キリスト教主義で経営している平和学園へ通学させることとした。両親は当時は信仰をも

っていたわけではなく、ただ宗教学校なら安心して託せると考えただけのことだった。ところが、紀子ちゃん

が二年生になった頃からその言動に「おや」と思わせるようなことが多くなって両親を驚かせた。まず第一に食事の前や、就寝の際

など、必ずお祈りをするようになったことだった。誰からもいわれないのに、独り目をつぶって頭を下げ、何事かを祈るいじらしいわ

が子の姿を見て、両親は何かしら胸が一ぱいになった。毎朝、始業前に行われる学校の礼拝にも遅れないよう

出かけて行ったが、帰宅して、たどたどしい口調で話す「神さまのお話」が両親の心にほのほのとしたものを注いだ。ところが、昨年

の春、三年に進級した紀子ちゃんに急に元気がなくなつて「わきばらが痛い」と訴えるので、念のため医者に診せると、盲腸炎で一刻も早く手術をせねばならぬという。そこで急いで最寄

の茅ヶ崎病院に入院させ、手術をすることになった。何といってもまだ十歳の幼

な児、どんなにか痛がることだろうと、両親は手術をうける前から、自分たちの脇腹が痛くなる思いがして、

悲しげに紀子ちゃんの顔をのぞきこんだ。が当の紀子ちゃんは一向に動ずる色もなく、両親に向っていった

「紀子、ちっともおっかなくはないわ。だって、エスさまがついていて下さるんですもの」

果して紀子ちゃんは手術の苦しみにもよく耐えた。じっと目をつぶって、一心に神に祈っているらしい姿

が、両親の眼にはわが児ながら神々しくさえ映った。「エスさまにお祈りをしていたから、ちっとも痛くなかつたの」

それ以来食前の感謝も紀子ちゃん独りではなくお母さんが一しょであり、学校で覚えて帰って紀子ちゃんが無心にうたう讃美歌にも、時にはお母さんが合唱することがあった。

この母と子のつゝましい姿を眼のあたり見て、お父さんも心を動かされずには居られなかった。愛するわが児が一筋に信じ、わが妻もまた信仰するようになった神さまなら、自分も信仰

したい——そういう気持ちになって、間もなく夫人と一しょに教会に出かける姿が見られるようになった。

紀子ちゃんの無心の伝道によって一家は和風堂に満つるクリスチャン・ホームとなつたのである。



「紀子は今」

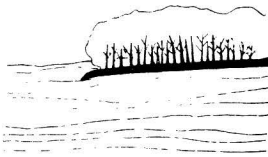
河村 紀子

「私があけぼのの翼をかって海のはてに住んでも、あなたの御手はその所で私を導き、あなたの右の御手は私を支えられます」詩篇139編9・10節。一九八二年の夏夫と私は、この聖書の言に励まされ、成田空港から英国の聖書学校へと出発しました。夫46才、私39才、人生の最盛期ともいふべき時、社会的に得たもの全てから離れ、いっさいを神にゆだねての、方向転換の旅立ちでした。一見カッコ良く、又一見何を血迷ったかと、思われるような、二人の姿であったようです。

私最近、横山先生から36年に刊行された、故村島校長の書かれた「潮騒はささやく」の一部を送っていただいた。そこには、小学2・3年の頃の私の記事がありました。私がどんなにイエス様を信じ共に歩んできたかという証しが、書かれていたのです。実際、平和学園での毎朝の礼拝で聞いた、神様のお話には、素直に受け入れ、イエス様のスピリット、そのまゝに生きようと幼いながら真剣でありました。こゝで私は、自分の人生に一つの事を見つめます。それは、光の中を歩く人生と、暗の中で苦闘した人生です。あの頃は、全く光の中を歩む子供であったと思うのです。

しかし、中学生になった頃から、この世の荒波が襲って来ました。襲って来たものは、暗やみとなって、真実のものを全ておぼつてしまいました。神は遠い存在となり、私は自分自身の手で、全ての事を行おうと、努力に努力を重ねました。二十年間、生活の中に求める事は、家族の経済的安定と、社会的に認められようとする事でした。ひとときも心に安らぎを覚えない毎日、身につけた技術とセンスとプライドと努力で、家族と共に店を持ち、フラワ

ードザインを広げて行きました。そんな中で13年前に結婚しました。主人はヴァイオリニスト。これまた、忙しく、厳しい世界。二人共、寝る時間だけが休息の時でした。これが私の運命、そう神様が与えてくれた運命だワ、ただがんばれば、いつかは、静かに暮せる時が来る」とただ漠然と老後に望みを置く様な者でした。自分の行き着く先を知らない、がむしゃらに突走る私と家族でした。四年前、妹の病がきっかけで、我家に神のサーチライトが照らされました。母が妹が父が、次々と教会へ行くようになり、真実な方に再び目を向け始めたのです。私は恐れを覚えました。実に、光を当てられる恐さです。間違っている所を見られる事への恐怖です。しかし、神の愛は、ついに恐れを取り去り、自らの意志で、光に当たっていたのだと望むようになったのです。



名簿のこと

卒業生の住所録ができているのはご存知でしょうがまだたくさんありますので申し込んで下さい。一部五百円です。

でも、就職、結婚、その他と、なかなか移動がはげしいのです。それでわからなくなっている人がかなりあります。知っている方はぜひ教えて下さい。

ブレイデーのこと

ここ数年四月二十九日の天皇誕生日をブレイデーとして、ドッチボールや綱引き、サッカーなどを、父母卒業生もいっしょにして、やっています。半日やおひるをたべて解散ということにしていますが、わりうまく定着してきました。前に卒業した皆さんもどうぞ、のぞきにきて下さい。おひるに食べるものはみんなの持ち寄りでもいいありますから、えんりょしないで食べて行って下さい。

林間学校と谷先生

池田信一

あの谷博次先生が……といっても、最近の平和学園小学校の同窓生は、あまりご存知ないかもしれない。しかし、私たち、昭和二十年代の初めに、林間小学校に学んだ世代にとっては、村島婦之先生と同じくらいに、忘れ難い先生のひとりであり、在学中はずいぶんお世話になったものだ。

私たちがいたころの林間小学校は、人家もまばらな松林の中に、ひっそりとある小さな学校だったが、そこで暮らした日々の事どもを、いま懐しく思い出すことができるのも、谷先生の教えを受けることができたおかげだと、私自身は思っている。

ところが、その谷先生が亡くなられた。今年の春浅く、まだ雪の降りしきる朝のことだったという。(今

年の冬は寒く、東京周辺でも雪の降る日が多かったけれど、その異常ともいえる寒さが、谷先生の死期を早めたのだろうか)

もっとも、私とその悲しむべき事実を知ったのは、かなり後のこと。林間時代の同級生だった山沢逸平くん(一橋大学教授)に、たまたま電話をして教えられたものだが、

「ちょうどよかった。僕たちはあした、谷先生の奥さまのところへ、おくやみに行くんだけど、キミも一緒に行かないか」

といわれ、小田急線・柿生駅の近くにある谷邸に、運よく同行することができたのだった。

その日、柿生の谷邸に集まったのは、これも林間学校の「名物先生」だった岡本俊二先生と、われらが同級生の木下毅くんや、相川(旧姓・相良)涼子さん、平野(旧姓・得田)義美さんなどであったが、そこで話題になることといえば、

やはり、谷先生とともにすごした林間時代のこと。とくにそのユニークな校風と、少人数教育のすばらしさであった。

実際、私たちがいたころの林間学校は、ほんとうに面白い学校で、それこそあのベスト・セラー『窓ぎわのトットちゃん』の学校も顔負けするほど。

なにしろ、私が転入学したときの同窓生(もちろん一学年一クラス)がわずか六人で、あとから木下くんや相良さんらはいってきただけで、最終的には二十人に達しなかったはずだ。

が、そんな少人数だったからこそ、私たちはかえって、恵まれていたというべきだろう。

六年生の夏休みには、伊豆の大島でキャンプをしたし、同じ年の春の遠足ではたしか、三島から熱海までの何キロか、丹那トンネルの上の山道を歩いた。そして修学旅行では、日光に行っただけである。

当時はまだ、戦後間もないの混乱期だったから、そんなときに持って行けるのは、おにぎりやサンドウィッチなどではなく、サツマイモの代用食だったものだが、そのように貧しい時代によく、伊豆の大島や日光あたりに、つれて行ってくれたもの。

私たち林間学校の生徒たちは、あの戦後の貧しい混乱期に、ものすごく「豊かな教育」をしてもらったのだと、いまにして思うのである。

「それにしても、現在の日本の教育状況では、あの林間学校のように、ノビノビとした『豊かな教育環境』など、存在することができないかも」

「そう。辻堂海岸や茅ヶ崎の街も、すっかり変わってしまったらしいし……」
いまは亡き谷先生と林間時代の思い出を語る私たちの口調は、ともすれば重くシメリがちにならざるをえなかった。

小学校一年のあゆみ

- 五十八年度 二学期より
- 10・1 運動会
- 10・22 音楽会、バザー
- 10・25 各学年社会見学
- 10・28 新入生選考日
- 12・16 クリスマス礼拝
- 1・12 席書大会
- 2・13/16 五六年スキー教室
- 3・1 陸上記録会
- 3・16 マラソン大会
- 3・20 卒業式・謝恩会
- 五十九年度
- 4・6 始業式
- 4・30 プレイデー
- 5・7より 家庭訪問
- 5・11 母の日礼拝
- 5・15/17 自然教室 東山荘
- 5・17 大塚先生記念礼拝
- 6・5/8 六年生修学旅行 (東北方面)
- 6・12 田植え
- 6・16 ドッジボール大会
- 6・22 PTA主催音楽会
- サンバ'84
- 7・4/10/13 水泳

九十の道

(旧職員) 葛生志ん

なつかしい同窓会誌「まっかぜ」ご送付頂き何十年か昔を思い出しなつかしんでおります。何か原稿をとのお言葉でしたが思い出のみ多くまとまりませんので自分の歩んできた苦しかった九十の道でもとペンをとりました。

大正四年に学窓を出てから三十年公立小学校に奉職その間に種々の出来事に出会いました。昭和十五年には三年間の闘病生活に勝てなかった主人が七人の子(内六人就学中)を残して帰れぬ世界に旅立たれてしまいました。それよりは学校を出たばかりの一人の子に支えられ主人の三回忌法要も無事にすませホッと一息ついていた十八年の一月ふとした風邪がもとで杖とも柱とも頼んでいた子が二十三才の若さで神に召されてしまいました。昼の勤めを

終え夜ともなれば子等の寝静まった後は涙の乾くひまもなく夜明けと共に心をと

り直しつとめて明かるく強くと思いつつも心の痛手ものやる方なく三十年続いた仕事にも隙間風の吹き荒む気持ちにかられ昼夜なく働ける仕事はないかと考えるようになりしました。そんな十八年のある夏の日主人と息子の墓参をすませ帰りの墓地でバツタリ同窓の先輩に出

会い近況の話に及んだ時友は突然「アッそれならあなたに最適の仕事があるすぐ社長に会ってほしい」、「仕事は会社の青年学校と舎監」このことにこれこそ私の導きと直ちに紹介、面接、採用とトントンと話は進み学年途中ではあったが会社でも急がれるまゝに一学期の終わるを待って二十年近く勤めた学校へはご無理を願

生の話し相手にと暇なき朝夕、我が子等はそれぞれの

学業に励む日々、「求めよさらば与えられん」これこそ神仏のご加護と感謝でした。かくして六年余昭和二十五年定年退職。会社在任中は戦時中のこととて敵の空襲をさげ女子寮は古都鎌倉の旅館を借り切り毎日工場と寮との往復、夜は空襲に備え寮生を守らねばならず家

では食料や燃料の不足勝と戦わねばならず銃後の仕事も容易ではなかったことも今はなつかしい思い出です。やがて戦いは終わり身は退職、今後の余生をと考えていた折も折茅ヶ崎の友人よりの紹介で平和学園にご縁が出来その時の導きのお一人が奇しくも現在の飯野校長であられたことも神への感謝です。時は二十五年九月やさしい村島先生に迎

のエリザベスサンダースホームの恵まれぬ子等のために奉仕させて頂くことにな

り沢田園長の元で二十余年働かせて頂き五十六年春米寿を迎え六十六年の仕事を終わらせて頂きました。省りみればここまで家族を支え仕事を続けさせて頂いたことは神仏のお護りと厚き友情の賜と感謝の外はありません。

五十九年五月平和学園で行われた故大塚先生の記念礼拝に参列させて頂き後新装成った本館に案内され、雨の日長靴を履き傘をさして職員室と離れた教室を往復した昔を偲び生れ変わった平和の偉容と整備された姿にただ驚くばかりでした。益々学園の発展と同窓会の隆盛を心からお祈り致します。現在私は多くの子、孫曾孫等に守られ健康にも恵まれ幸せな老後を感謝しております。

運動会、音楽会
バザーのお知らせ

9・29 運動会
10・27 学芸会、バザー

今年の運動会には、ラジオ体操のかわりに、高校卒業生の李礼子さんが考案して下さった「新体操」をご披露することになっていきます。曲もこれまた卒業生のご主人が作曲して下さいました。たのびバックにしてやることになっていきます。ビートのきいたのをということ、ドラムなど、子供が自然に踊り出すようなのを考えています。ウルトラマンも登場するそうです。お二人とも二世が一、二年に在学しています。



○卒寿越えふりむきみれば
山坂のけわしき道も
なつかしきかな

“あの時君は
若かった。”

後藤真理子

私は、四十七年四月から五年間、平和学園小学校で教師として勤めさせていただきました。最初に三年生を受け持たせていただきましたが、初めての年で、やはり一番、彼らのことが印象に残っています。(勿論、そのあとのクラスの人たちのことも、十年近くたった今も忘れることはできません。)あの時、九才だった彼らは、もう二十一、二の立派な青年であり、美しい女性になっていられるわけです。でも私の目にかぶ彼らは、いつまでも腕白で、少々生意気な、そして本当のところは、まだ幼なさのぬけないかわいい子どもたちなのです。

くれる者だとばかり思っていた私は、彼らの言動に戸惑い、途方にくれる毎日でした。彼らの方にしても、私の言動に敏感に反応し、初めての年で、手さぐりで不安気になっている態度に戸惑ってしまっただけでしょう。(このように書くと、さぞかし、蜂の巣をつついたようなクラスだったように思われてしまいそうですが、全員がそうだったというわけではありません。でも落ち着きのないクラスだったのは否めません。)時には感情むき出しで怒り、泣き、どうしたら、学級経営がうまくいくのであるうかしらと、必死の毎日でした。

初という時があって、初めから、何もかも完璧に出来る人などいないのだからとおっしゃって、暖かく見守って下さったことが、どんなに慰めになったことでしょうか。十三年たった、今年一年生になった娘と、三才になる息子を持つ母親としての今の目で彼らを見、彼らと接していたら、どんなにかスムーズに一年が過ぎたことでしょうか。

でも、何もわからず、ただ若さにまかせて必死で夢中で体当たりで接した一年、いや五年というあの時期は、それなりに、何かがあってくれたことだろうと不遜ながら思っています。誰にも何事にも最初というものがあ、社会人になった。これから社会人になるうというあの時の生徒たちにも最初があり、若さ、そのエネルギーを存分に発揮する時があることでしょうか。(もう発揮しているかも知れないが。)この今でなければ出来ないことがあるでしょう。若いということ、素晴らしいことです。専業主婦にどっぷりひたってしまっている私には、あの時君は、若かった。”と、誰かの歌の文句ではないが、遠い昔の、取り戻したくて、取り戻せない、遠い者になってしまった、若いエネルギーが、無性に、懐かしく思い出されるのです。若さのゆえに、迷惑を被らされた部分も多々あったことと思えます。でも、その中に、何か小さい、ほんのちよっとしたもの、彼らの心の中に思い出していただければ幸いです。若い今は二度と来ないのです。(気持ちの上では、いつまでも持ち続けて行くつもりですが……)

長い人生において、平和で過ごした五年間は、たった五年間であるけれども、実は、十年にも十五年にも匹敵する、貴重な、決して忘れることの出来ない五年間であり続けるでしょう。平和の皆様、平和に連なる皆様、本当にありがとうございます。腕白坊主たち、万歳!!

編集後記

横山哲夫

早いもので「松風」も第四号になりました。ルポライターの池田信一君が「くらしの百科」に平和のこと紹介して下さったので、ぜひぶん遠くからも問い合わせがありました。ご安心下さい。小学校は今も各学年一クラス、二十二、三名(平均)ずつとやっています。村島先生の言う「自由で平和で温い」気風は昔とちっとも変わりません。又二年後、「ハレー彗星のくる年」にでも皆さん集まりませんか。